



# 2012年度 ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金募集要項

本奨学金は、本学学部および大学院に在籍する学生で、固定的な性別役割分業観にとらわれない視点にたって、男女共同参画社会の実現に寄与するための活動・研究をした者（団体）、あるいは活動・研究を計画している者（団体）を幅広く対象とします。

- 書類提出期間：2012年10月1日(月)～2012年10月25日(木) 17:00まで
- 書類提出先：学生部学生厚生課奨学金係・新座キャンパス事務部学生課・独立研究科事務室
- 採用発表：11月30日(金) 学生部学生厚生課奨学金掲示板、新座キャンパス奨学金掲示板、ジェンダーフォーラム掲示板(10号館通路)に掲示予定
- 授与式：12月上旬(予定)

## (A) ジェンダーフォーラム論文賞

対象：学部学生・大学院学生（個人・団体）  
 支給額：優秀：10万円、佳作：5万円  
 採用件数：1～4件  
 選考方法：論文審査  
 提出書類：①ジェンダーフォーラム論文賞申込書\* ②論文（日本語2万字以内の未発表論文）  
 備考：執筆にあたってはジェンダーフォーラム『年報』投稿規定に従うこと。

## (B) 活動・研究助成金

対象：学部学生・大学院学生（個人・団体）  
 支給額：総額20万円  
 採用件数：1～2件  
 選考方法：書類審査・面接  
 提出書類：①活動・研究助成金願書\* ②奨学金使途を含む活動・研究計画書（A4用紙 3枚程度 書式自由）  
 面接日時：2012年11月16日(金)、18:00～を予定。個々の面接時間はあらかじめ連絡する。  
 面接会場：立教大学池袋キャンパス、ミッチェル館1F ジェンダーフォーラム  
 備考：採用者（団体）は活動・研究の中間報告を翌年3月末に提出の上、最終的な報告書または論文を11月末に提出すること。提出の活動報告書または論文は、ジェンダーフォーラム『年報』に掲載する。

【ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金（A）・（B）の申込書（願書）の利用目的】  
 標記の申込書（願書）で取得した個人情報は、奨学金採用者（団体）の選考および発表のために利用する。採用者（団体）の論文・報告書等は「年報」に掲載する。また、奨学金制度広報のため冊子、WEB等に採用者名を記載することがある。以上に同意した上で、申込書（願書）を提出すること。その他、個人情報の取扱いについては、ジェンダーフォーラムのホームページ（<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/>）を参照すること。

※ 詳細や不明な点はジェンダーフォーラム事務局にお問い合わせください。  
 （ジェンダーフォーラム事務局 Tel: 03-3985-2307 E-mail: [gender@rikkyo.ac.jp](mailto:gender@rikkyo.ac.jp)）

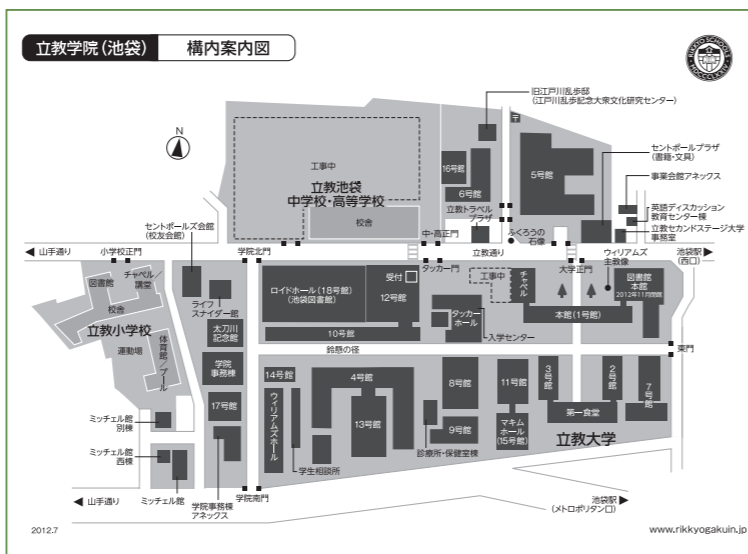
\*申込書、願書はジェンダーフォーラム事務局、学生部学生厚生課窓口、新座キャンパス事務部学生課、独立研究科事務室窓口にあります。  
 ホームページ上からもダウンロードできます。（<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/>）



## 立教大学ジェンダーフォーラム

開室日：毎週月曜日～金曜日  
 開室時間：10:00～16:00(月火木金) 13:00～18:00(水)  
 場所：立教大学池袋キャンパス ミッチェル館1階  
 TEL&FAX: 03-3985-2307  
 E-mail: [gender@rikkyo.ac.jp](mailto:gender@rikkyo.ac.jp)  
 URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/>

詳細は、10号館通路のジェンダーフォーラム掲示板またはHPでご覧ください。



Gemとは…光り輝く宝石。  
 Gender Encountering at Mitchell  
 を表します。「ミッチェル館での  
 ジェンダーの出会い」の意です。

2012年度公開講演会（2012年7月6日(金)）

## ジェンダーとカウンセリング —関係性としての友情・親密さと距離

講師：河野 貴代美 氏（元お茶の水女子大学教授）

公開講演会といえば、講師によって語られる内容はもちろんのことだが、講師と参加者との「距離感」がその成否を大きく左右するものだ。講師の人柄や情熱が参加者の関心、気持ちと響き合うかどうか。コンサートや演劇と同じように、公開講演会もやはりライブである。書籍やネットによる情報流通とは別の魅力がある。

講師の河野貴代美氏が壇上に登場すると、まずそれだけで明るく親しみやすい、それでいて落ち着いた雰囲気気が伝わってきた。「自分はすでに引退して5年も経っている」「途中でしばらく上を見上げていても許してほしい」「無事に途切れず話しつつ上げられれば」とユーモアを交えてお話を始められ、我々聞き手の心をあっという間に掴んでしまった。

講演は、フェミニズム、ウーマンズリブ、ジェンダー、といったキーワードによって、20世紀初頭から河野氏がフェミニストセラピーに取り組むまでの時代的背景を整理し、社会的あるいは学問的な移りかわりを解説するところから始まった。聴衆として参加した皆さんの中には、この分野に強い関心を持ち、すでに関連書籍を読んだり研究を蓄積していたりする方、あるいは専門家として関わっている方も多かったように思うが、門外漢（たとえば私のような）が参加していることも考えてくださり、基礎的な知識から丁寧に説明してくださったのはたいへん有り難かった。

そんな前段を経て、お話は佳境に入る。「関係」とはなにか、それは自立した個人同士が育んでいくもので、努力が必要だ。しかしそもそも「自立した個人」とはなにか。なかでも精神的な自立とは。河野氏は次々と根源的な問いを投げかける。つい、普段の生活の中では突き詰めて考えることを私などはないがしろにしてしまいがちだが、こうしたいわば「答えのない問い」に対する河野氏の姿勢は、ご自身の経験、時には強烈な経験に裏打ちされた真摯で、強靱で、しなやかなものだった。

相手の意思を想像し、忖度する。河野氏はそうした人間関係には限界があると説明する。やはり対話することが重要だ。場合によっては相手にとって、あるいは自分にとって苦痛であることであっても対話を積み重ねていく。友情という関係性はそうした時に厳しいものである、という河野氏の指摘は、ともすれば「空気」を読み、人間関係から不快な要素を排除することだけを「コミュニケーション能力」と捉えてしまいかねない我々に対して、基本に立ち帰れと諭されているようだった。

質疑応答では、新田ジェンダーフォーラム所長を教材(?)としたカウンセリングのデモンストレーションあり、本学学生の恋愛相談を受ける場面あり、と、参加者一同が楽しめる内容が続き、講演会は和やかな雰囲気の中で終了した。河野氏のご経験、学識、人間味あふれるお人柄と、参加者の熱意が見事に重なり合った、極めて有意義な時間であった。

木村 健太（ジェンダーフォーラム運営委員/本学職員）

## これが男の生きる道?——変化の時代をいきる

主催：豊島区男女平等推進センター（エポック10）

共催：NPO法人ウィメンズアクションネットワーク(WAN)、拡がるブックトーク実行委員会、立教大学ジェンダーフォーラム

後援：岩波書店

第55回ジェンダーセッション(2012年6月11日(月))

## 海の向こうの少女たち —翻訳小説から少女マンガへの道のり

話題提供：大串 尚代 氏(慶應義塾大学文学部准教授)

アメリカ文学と日本の少女漫画はどのように関係しているのだろうか？アメリカ文学を専攻する私は、むしろその問い自体に深い疑問を抱かないまま、今回のジェンダーセッションへ出席したが、大串先生の研究の来歴と興味の広がり深く感銘を受けた。

先生は、まず米沢嘉博(1953-2006)の『戦後少女マンガ史』(1980)と別冊太陽の「子どもの昭和史」シリーズを取り上げ、明治期の少女雑誌から解説を始めた。初期は小説中心だった少女向けの雑誌だったが、挿絵や写真など視覚的な素材に割かれた紙面が拡大し、次第に漫画が多く描かれるようになったとのことである。なかでも中原淳一(1913-1983)による、大きな瞳の女の子に花の背景という挿絵モチーフが、少女文化的な雰囲気確立した画期的なデザインを作ったという。

そんな少女雑誌の中で描かれた漫画が、海外の文学といかに関わっているのだろうか。これについては、19世紀末から原作の出版とあまり時差なく翻訳されていたアメリカの家庭小説が、前述した少女雑誌に盛んに掲載されたことがヒントとなる。昭和10年代から20年代にかけて、そのような雑誌では、世界の名作としての児童文学が紹介されていた。同時に同じメディアで増えていった「挿絵」が、それと並行して文化的な関係性を演出する。そのような作品を読んできた漫画家たちが、翻訳小説を土台とし、舞台としての海外を描きだし、少女漫画を作っていった。

著名なアメリカ文学研究者、ジェイン・トムキンス(Jane Parry Tompkins,1940-)によると19世紀の家庭小説は、女性の美德や行動規範を示すとともに、そうした規範にとどまらない女性を描くことによって、家父長制の抵抗や女性の自立を描いたという。日本の少女漫画にも同じことが言えるのではないかと、大串先生は示された。

また、「学園物」は、「今、ここ」の、読者にとって身近な問題を扱うものであるのに対して、海外を舞台にしたものは常に「ここではないどこか」、「今ではないいつか」を描くものであり、その設定は、「あらゆる外部のコンテクストを断ち切ったうえでしか存在しない関係性」を求める読者に受け入れられたのではないかと、とも先生はおっしゃっていた。

「権威ある」アメリカ文学と、つまらないと思われがちな少女漫画を繋げること、それも1人の研究者として——このことはまた、「女性文化」を享受してきた女性にとって研究とは何かという問いに与えられた1つの答でもある。また、高尚とされているものと瑣末と思われているものの線引き(小説と漫画)、常識化したルールを作った「文化的作為」という、忘れがちな視点を思い出させてくれるセッションでもあった。

姫田 奈々瀬(本学大学院文学研究科博士課程前期課程)

私は昨年もこの「アカデミズムの扉を開く」を聴きに行ったことがあり、

今回で2回目になる。昨年は発表者に男子学生が1名含まれていたが、今年は女子学生のみだった。

ポケモンを題材に雌雄判別についての分析を行った発表は、「メディアが性別に対する固定観念を子供たちに刷り込ませ、そのメディアを見て育った世代が偏向的な番組を作成し、さらに番組を見た子供たちが固定観念を持つ」という悪循環に気づかされる内容だった。また、NHK大河ドラマでの女性の描かれ方の変化を分析した発表では、公共放送機関たるNHKの男性社会的な組織体質に驚かされた。

男女不平等な社会下で「良いとこ取り」をしながら男性より得をする女性を「ズルい女」として分析を行った学生は、自身も「ズルい女」と自覚しつつ、私的領域における女性の甘えが公的領域においてジェンダー問題を発生させていると考察した。この問題は行政などであまり取り上げられてこなかったため、興味深い内容だった。

米文学・仏文学作品をジェンダーの観点から分析した学生・院生の発表は、初めて耳にする作品が多かった。しかし発表を聴いて、文学作品での男女の描写は現実社会におけるジェンダー問題に通じるものがあると感じた。男性が女性に対し優位に立って男らしさを維持するような描写は、現実社会において、男性が女性を庇護し(その代償として性的に支配し暴力で抑圧することも多い)男らしさを維持することと似ていると思う。また、異性愛以外の性的指向を蔑視する描写も、現実社会と共通するものである。

私たちの世代はジェンダーに対する問題意識が希薄な人が多く、さらに近年では20～30代女性の保守化傾向が高まるなど、ジェンダー問題解消への勢いが鈍化している。今回の発表を聴いて、今まであまり目を向けられていなかったジェンダー問題に注目する必要性を感じた。また、発表者の皆さんの技術を倣い、卒論の作成の参考にしたいと思う。

原井 勇輔(立正大学経済学部経済学科)

